

原 著

養護実習の体験を基にした養護教諭養成課程における基本的な技術の検討

岩佐 美香, 川崎 裕美

広島大学大学院医歯薬保健学研究科地域学校看護開発学

(平成 29 年 6 月 28 日受付)

要旨: <目的>看護師養成課程における養護実習を行う学生の立場で, 学校保健室で見学実施を経験した看護技術と, 使用頻度が多かった看護技術, また難易度が高く養護実習までに学内で学んでおきたい看護技術を把握し, 職務に必要な実践力を効果的に高めるためのカリキュラム整備のために, 重点的に指導する必要がある基本的な看護技術項目を導き出すことを目的とした。

<方法>4年制大学の看護学部4年生に所属する学生のうち, 2013年から2015年に養護実習を履修した学生を対象とした。調査協力の同意を得られた学生 A 大学 39名, B 大学 29名の合計 68名を調査対象とした。回収したアンケートを養護実習経験項目 70項目ごとについて単純集計を行った。難しいと感じた技術項目と学習時間を増やしたほうが良いと思う技術項目の関連については, χ^2 検定および Fisher の直接法による検定を実施した。

<結果>養護実習中に見学した技術項目は【精神的安寧を保つ工夫の計画】との回答が最多であった。養護実習中に実施した看護技術項目は【創傷の保護(カットバン, ガーゼ)】との回答が最多であった。養護実習中に使用頻度が高かった看護技術項目は【創傷の消毒】との回答が最多であった。また, 学生が養護実習中に難しいと感じた看護技術項目は【症状, 病態を正確に確認】であった。【創傷処置の観察】と【創傷の保護(カットバン, ガーゼ)】が学生にとってさらに学習時間が必要だと感じる技術項目であった。

<結論>養護実習中に学校保健室で養護教諭が用いる優先度の高い技術は, 「創傷管理技術」であることが示された。また, 学生の回答から, 「創傷管理技術」のほかに, 「症状・生体機能管理技術」カテゴリーにある技術項目も必要であると明らかにした。本研究で抽出された技術項目を学校保健室で特に必要とされる技術項目と位置付け, これを「養護看護技術」とし, 重点的な指導が必要な技術であることを示した。

(日職災医誌, 66:117-123, 2018)

—キーワード—

養護実習, 養護教諭, 看護技術

1. はじめに

養護実習は養護教諭を目指す学生が既習の知識と技術を統合し, 学校現場で教育実習を行い, 実践能力を養う目的で実施されている。養護実習の期間中, 学生は様々な場面に直面し, 養護教諭がどのように児童生徒に対応しているのか体験を通して学ぶ。養護教諭が保健室で対応した内容は, 平成 23 年度の保健室利用状況に関する調査報告書¹⁾によると, 養護教諭が対応した内容を校種別で確認すると, 小学校では, 「怪我の手当」, 「健康観察」, 「バイタルサインの確認」の順に多く, 中学校では「健康観察」, 「バイタルサインの確認」, 「怪我の手当」の順に多かった。高等学校では, 「健康観察」, 「バイタルサイン

の確認」, 「怪我の手当」の順に多く, 校種別において順位は異なるが, 保健室では養護教諭が看護技術を使用していることが伺える。このように, 学校保健室では様々な状況に対して看護技術が使用される機会が多く, 養護教諭養成課程では看護技術のトレーニングが必要不可欠である。全国で, 養護教諭一種免許状の取得が可能な大学は 159 校, 通信課程では 4 校であり, 養護教諭二種免許状の取得が可能な短期大学は 13 校, また, 養護教諭専修免許状の取得が可能な大学院修士課程は 93 校である。学部においては教育学部, 看護学部, その他の学部, 学科など多岐にわたっている。今野²⁾は, 「養護教諭養成においては, 教育実習と同様に養護実習に臨むことが必須であるにも関わらず, 必ずしも系統的な体験的・実習的

授業カリキュラムで学ばせるには至っていない。つまり養護実習が養護教諭の実践そのものについて学ぶものであるにも関わらず、学内で実践的に学ぶ機会が少ないことは、養護教諭養成上の課題であるとしている」と述べている。看護系学部での養護教諭養成課程は、基礎となる看護技術は卒業要件であるため、講義は医学・看護学を中心とし、看護技術はテストが実施される。そのため、学校保健室で必要とされる技術に特化して繰り返し練習する時間やテストの時間の確保は困難である。

先行研究より、大川・他³⁾は「学生が養護実習を充実したものにし、養護教諭への志向性を高めるためには、養護実習のための十分な準備を行った上で実習に臨む必要がある。」としており、養護実習の成果を高めるための事前指導の重要性を示唆している。また、長峰⁴⁾は「養護実習で得た体験をより深化させ、養護教諭の職務に必要な基本的な実践力を向上させるための演習内容の検討が必要である」としている。つまり、実践力の向上には志向性が必要であり、そのためには十分な準備が必要である。これらのことから、養護実習について他の研究では、養護実習の意義・目的、実習に向けての学内での指導といった実習前までの一連の過程と内容を概観して述べた川崎・他⁵⁾の研究や、養護実習において、見学・実施できた項目・内容について調査したものもあり、事前準備に対する課題の検討がなされてはいる。しかしながら、看護師養成課程の学生が養護教諭一種免許を取得する場合には、看護師国家試験受験資格のための科目と養護教諭一種免許取得のための教職科目を効率よく学習する必要がある。看護師養成課程では、臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術水準の技術項目については既に、厚生労働省医政局看護課「基礎看護教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書（平成15年3月）」の「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術水準」で示されている。これに比べると、養護実習では養護実習生が行う基本的な技術の達成水準として、何をどれだけ学ぶかという指針は示されていない。

そこで、看護師養成課程における養護実習を行う学生の立場で、学校保健室で見学実施を経験した看護技術と、使用頻度が多かった看護技術、また難易度が高く養護実習までに学内で学んでおきたい看護技術を把握し、職務に必要な実践力を効果的に高めるためのカリキュラム整備のために、重点的に指導する必要がある基本的な看護技術項目を導き出すことを目的とした。

II. 対象と方法

1) 対象

4年制大学の看護学部4年生に所属する学生のうち、2013年から2015年に養護実習を履修した学生を対象とした。研究対象者として、A大学看護学部看護学科4年生のうち養護実習を選択した者42名、およびB大学

看護学部看護学科4年生で養護実習を選択した者35名の合計77名にアンケートを実施した。このうち、調査協力の同意を得られた学生A大学39名、B大学29名の合計68名を調査対象とした。アンケートの回収率はA大学93%、B大学83%、全体の回収率は88%であった。

2) 方法

厚生労働省医政局看護課「基礎看護教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書（平成15年3月）」の「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術水準」および先行研究を参考にして、研究者らで独自の『養護実習経験項目アンケート』を作成した。本アンケートでは、学校現場で使用する看護技術を(1)環境と整える技術、(2)食事援助、(3)排泄の援助、(4)活動と休息の援助、(5)清潔・衣生活の援助、(6)呼吸・循環を整える技術、(7)創傷管理技術、(8)与薬の技術、(9)救命救急処置、(10)症状・生体機能管理技術、(11)感染予防技術、(12)安全管理技術、(13)安楽確保の技術、の13のカテゴリーに分けた。そして、70の技術項目を策定し、各カテゴリーに属すると判断できる技術項目をそれぞれに割り当てた。また、これらの技術項目に該当しない項目を導き出すために自由記入欄を設けた。

この『養護実習経験項目アンケート』を養護実習生に配布し、各技術項目で養護実習期間中に実習で1回でも、見学もしくは実施、あるいは両方経験した場合に「○」を記入することを説明した。なお、『養護実習経験項目アンケート』への記入は、学習の妨げにならないように配慮し、実習期間が終了した後、実習記録を提出する際に合わせて調査依頼をした。記述したアンケートは無記名で封筒に入れ、封をして回収用箱に投函、もしくは郵送で回収することでプライバシーへの配慮をした。回収したアンケートについては、養護実習経験項目70項目ごとについて単純集計を行った。また、難しいと感じた技術項目と学習時間を増やしたほうが良いと思う技術項目の関連については、 χ^2 検定およびFisherの直接法による検定を実施し、 $P < 0.05$ を有意とした。統計処理はSPSS23を用いた。本研究は、梅花女子大学研究倫理委員会の承認を得た。

III. 結果

1) 養護実習先の校種

調査対象者が養護実習先として訪問した校種は、小学校が35名(51%)、中学校が30名(44%)、高校が13名(19%)であり、複数の校種を実習先(アンケート調査対象者は68名)として訪問した学生も含む。

2) 養護実習中に見学した看護技術項目

養護実習中に見学した看護技術項目ごとについて、結果を合算して集計を行った(表1)。【施設の安全管理体制の理解】が最も多く24名、【精神的安寧を保つ工夫の計画】19名、【環境整備(温度、湿度、換気、臭気、騒音)】

表1 養護実習中に見学および実施した看護技術項目の集計 (n=68)

カテゴリ	質問項目	見学	実施	カテゴリ	質問項目	見学	実施
1	環境整備 (温度, 湿度, 換気, 臭気, 騒音)	17	43	8	インスリンの作用と副作用についてのアセスメント	1	0
1	基本的なベッドメイキング	8	27	9	意識レベルの観察	9	9
1	基本的なリネン交換	7	11	9	気道確保	1	3
2	食事の工夫と援助	6	6	9	口腔内の観察, 異物除去	3	2
2	栄養状態のバランスについてのアセスメント	9	10	9	人工呼吸の準備と方法	1	3
2	疾患別食事の理解	12	2	9	心臓マッサージ	2	3
3	排泄のアセスメントと援助	11	8	9	教職員への応援要請	13	6
4	車いすでの安全な介助・移送	9	10	9	救急備品の場所と物品内容の把握	17	17
4	担架での安全な介助・移送	8	2	9	AEDの準備と必要性の把握	9	10
4	良肢位の保持	7	7	9	止血	3	20
4	ボディメカニクスの知識や技術を使った体位変換	3	3	10	呼吸測定	3	9
5	清拭	0	1	10	脈拍測定	10	31
5	口腔ケア	1	6	10	体温測定	2	62
5	部分浴	1	2	10	血圧測定	12	10
6	衣生活支援	8	8	10	測定値の記録	4	53
6	体位ドレナージ	1	0	10	身長測定	8	35
6	体温調節方法の選択	8	11	10	体重測定	9	32
6	温巻法 (ホットバック)	0	7	10	視力測定	6	19
6	温巻法 (湯たんぽ)	3	20	10	聴力測定	9	8
6	温巻法 (電気あんか)	2	1	10	症状, 病態を正確に確認	10	37
6	冷巻法 (氷枕)	4	33	10	観察した症状, アセスメントの記録と報告	5	47
6	冷巻法 (アイスバック)	7	49	10	尿検査の検体取扱い	1	4
7	創傷処置の観察	2	62	11	血糖測定	1	1
7	創傷の洗浄	3	61	11	スタンダードプリコーションが実施できる	3	36
7	創傷の消毒	3	52	11	洗浄, 消毒, 滅菌のうち適切な方法の選択	7	36
7	創傷の保護 (カットバン, ガーゼ)	1	64	11	適切な手洗いの方法	2	46
7	包帯法 (巻軸帯)	10	17	11	防護用具 (ガウン, 手袋) の使用方法	2	10
7	包帯法 (三角布)	10	1	11	医療廃棄物管理	4	7
7	包帯法 (ネット包帯)	14	12	12	施設の安全管理体制の理解	24	19
7	創傷の包帯法 (副木, シーネ固定)	9	6	12	転倒・転落予防の実施	6	4
7	創傷の湿布	8	46	12	インシデント (ヒヤリ・ハット) 事例や事故防止の報告	8	2
7	滅菌物の取り扱い	3	16	12	リスクマネジメント	11	9
8	経口薬の与薬	4	2	13	安楽な体位の保持	14	19
8	外用薬の与薬 (点眼)	11	7	13	安楽を促進するケア	8	21
8	外用薬の与薬 (塗布)	6	30	13	精神的安寧を保つ工夫の計画	19	18

17名, 【救急備品の場所と物品内容の把握】17名, であった。

3) 養護実習中に実施した看護技術項目

次に養護実習中に実施した看護技術項目の結果を集計した (前掲表1)。ここでは, 実施のみと見学および実施と回答した者を含めた。【創傷の保護 (カットバン, ガーゼ)】が最も多く64名, 【創傷処置の観察】62名, 【体温測定】62名, 【創傷の洗浄】61名, であった。

4) 養護実習中に使用頻度が高かった看護技術項目

学生の視点から養護実習中に使用頻度が高かった看護技術項目を集計した。この調査項目では学生に3つの技術項目を回答してもらった。回答結果から最も使用頻度が高かった技術項目は【創傷の消毒】23名であった。これに続き, 【創傷処置の観察】22名, 【創傷の保護 (カットバン, ガーゼ)】21名, 【創傷の洗浄】20名, 【体温測定】20名といった技術項目の使用頻度が高かった。

5) 養護実習中に難しいと感じた看護技術項目

学生が養護実習中に難しいと感じた看護技術項目 (3つ) は表2の通りで, 最も多かったのは【症状, 病態を正確に確認】31名であった。これに続いて【観察した症状, アセスメントの記録と方向】17名, 【包帯法 (巻軸帯)】14名, 【精神的安寧を保つ工夫の計画】13名であった。

6) 難しいと感じた技術と学習時間を増やしたほうが良いと思う技術の関連

養護実習中の経験より, 学生が大学の養護教諭養成課程で学習時間を今以上に必要だと思う技術項目を集計した (表3)。実際に養護実習を経験することで学校保健室ではどのような技術項目が必要であるかを, 指導を受ける学生の立場から把握を試みた。【創傷処置の観察】16名と【創傷の保護 (カットバン, ガーゼ)】16名が学生にとってさらに学習時間が必要だと感じる技術項目であった。これに続いて, 【包帯法 (巻軸帯)】15名, 【観察した

表2 養護実習中に難しいと感じた看護技術項目

技術項目	回答数	技術項目	回答数
症状、病態を正確に確認	31	環境整備(温度、湿度、換気、臭気、騒音)	2
観察した症状、アセスメントの記録と報告	17	疾患別食事の理解	2
包帯法(巻軸帯)	14	排泄のアセスメントと援助	2
精神的安寧を保つ工夫の計画	13	車いすでの安全な介助・移送	2
創傷処置の観察	10	担架での安全な介助・移送	2
創傷の保護(カットバン、ガーゼ)	9	冷罨法(アイスパック)	2
洗浄、消毒、滅菌のうち適切な方法の選択	7	包帯法(三角布)	2
リスクマネジメント	5	創傷の包帯法(副木、シーネ固定)	2
栄養状態のバランスについてのアセスメント	4	経口薬の与薬	2
創傷の洗浄	4	教職員への応援要請	2
創傷の消毒	3		

表3 講義で学習時間を増やした方がよいと思う看護技術項目

技術項目	回答数	技術項目	回答数
創傷処置の観察	16	精神的安寧を保つ工夫の計画	4
創傷の保護(カットバン、ガーゼ)	16	排泄のアセスメントと援助	3
包帯法(巻軸帯)	15	意識レベルの観察	3
観察した症状、アセスメントの記録と報告	14	洗浄、消毒、滅菌のうち適切な方法の選択	3
症状、病態を正確に確認	13	車いすでの安全な介助・移送	2
創傷の包帯法(副木、シーネ固定)	9	良肢位の保持	2
創傷の洗浄	8	包帯法(ネット包帯)	2
創傷の消毒	8	経口薬の与薬	2
包帯法(三角布)	6	救急備品の場所と物品内容の把握	2
止血	6	スタンダードプリコーションが実施できる	2
環境整備(温度、湿度、換気、臭気、騒音)	4		

症状、アセスメントの記録と報告】14名、【症状、病態を正確に確認】13名であった。

上記で述べた学生が難しいと感じた技術項目と学習時間が必要だと思う技術項目との関係について、Fisherの直接法による検定を行った。難しいと感じた技術項目のうち上位5つについて検定を実施し、【観察した症状、アセスメントの記録と報告】、【包帯法(巻軸帯)】は $p < 0.001$ で、【症状、病態を正確に確認】、【創傷処置の観察】は $p < 0.01$ で有意差が認められた。【精神的安寧を保つ工夫の計画】は $p > 0.05$ で有意差は認められなかった(表4)。

7) 自由記述による看護技術項目に含まれていない技術

学生の自由記述からは、「歯科検診」、「フッ素物洗口」など歯科に関する技術項目、「記録の整理、管理」や「(木、毛虫の)刺の除去」、「創傷の湿潤療法」などの創傷処置であった。その他「教室に行きにくい児童に対してのコミュニケーション技術」、「問診」、アレルギーに対する「エピペン」についての技術項目が挙げられた。これらは本研究で用いた看護技術には想定されていない技術項目であった。

IV. 考 察

今回の調査結果から、見学と実施を含めて養護実習中に学校保健室で頻繁に使用されると予想される看護技術のカテゴリーは「創傷管理技術」であることが明らかと

なった。用いられていた個別の看護技術は、【創傷の保護(カットバン、ガーゼ)】が最も多く96%の学生が経験をした。続いて、【創傷処置の観察】、【創傷の洗浄】、【体温測定】はそれぞれ94%、【環境整備(温度、湿度、換気、臭気、騒音)】は88%の学生が経験していた。このことから保健室で養護実習中に養護教諭や実習生が用いる使用頻度の高い看護技術は「創傷管理技術」であることが考えられた。

養護教諭養成課程の学生が養護実習中に難しいと感じた看護技術項目は【症状、病態を正確に確認】、【観察した症状、アセスメントの記録と報告】、【包帯法(巻軸帯)】、【創傷処置の観察】が難易度と講義の必要性双方の上位に挙げられていた。【創傷処置の観察】、【創傷の保護(カットバン、ガーゼ)】、【包帯法(巻軸帯)】は講義で学習時間を増やした方がよいと挙げられており、実習中に難しいと感じた技術の学習の必要性との関連性も検定の結果から明らかとなった。さらに、学生の自由記述から得られた歯科に関する技術項目や湿潤療法といった創傷処置の新たな技術項目、そして児童・生徒とのコミュニケーションに関する技術項目は今回の調査項目には入っていなかった。これらは学生の視点から得られた結果であり、学校現場で必要とされている新たな技術項目の可能性がある。

学生が学ぶ必要性を認識している状況では学生の学習効果が高い。しかし、看護実習後に学習の必要性を認識

表4 技術項目の難易度の感じ方と学習時間の増加の必要性

技術項目		学習時間の増加の必要性				P 値
		思わない (n=55)		思う (n=13)		
		人数	%	人数	%	
【症状、病態を正確に確認】	難しいと思わない	35	63.6	2	15.4	0.002**
	難しいと思う	20	36.4	11	84.6	
		学習時間の増加の必要性				
		思わない (n=54)		思う (n=14)		
		人数	%	人数	%	
【観察した症状、アセスメントの記録と報告】	難しいと思わない	48	88.9	3	21.4	0.000**
	難しいと思う	6	11.1	11	78.6	
		学習時間の増加の必要性				
		思わない (n=53)		思う (n=15)		
		人数	%	人数	%	
【包帯法 (巻軸帯)】	難しいと思わない	50	94.3	4	26.7	0.000**
	難しいと思う	3	5.7	11	73.3	
		学習時間の増加の必要性				
		思わない (n=52)		思う (n=16)		
		人数	%	人数	%	
【創傷処置の観察】	難しいと思わない	48	92.3	10	62.5	0.008**
	難しいと思う	4	7.7	6	37.5	
		学習時間の増加の必要性				
		思わない (n=64)		思う (n=4)		
		人数	%	人数	%	
【精神的安寧を保つ工夫の計画】	難しいと思わない	53	82.8	2	50.0	0.162
	難しいと思う	11	17.2	2	50.0	

(注) χ^2 検定による。P 値は Fisher の直接法の有意確率 (両側)。**1% 水準。

しているため、実習前に学生に認識させることが課題である。この結果より、これらの技術項目を養護教諭養成課程の学生に、その必要性を意識させながら習得させるカリキュラム構築が必要であると示唆された。

佐藤・他⁶⁾は、大学における講義や看護技術が実習において有効性はあるものの学生が技術の習熟度の不足を実感しており、子どもの多様な愁訴に対応するためには学内で行う演習に症状別のフィジカルアセスメントを含めた、場面を設定した演習を取り入れる必要性を説いている。したがって、看護系養護教諭養成課程における技術教育は、限られた時間枠の中で、学生が効率よく学べるために、基本的な看護技術を厳選して効率よく修得する必要がある。

石川・他⁷⁾は「養護教諭にとって救急法を含めた外傷への対応処置は、業務上非常に重要であるにも関わらず、その対応については不十分な点が多い」ことが現状であると外傷という枠組みで指摘している。石川・他は看護学実習Ⅱの9回の実習・演習において外傷の処置に関する講義を(1)切傷・擦過傷・熱傷の対応、(2)頭部外傷・鎖骨骨折、肩関節脱臼、(3)突き指、足間接捻挫、筋挫傷、膝前十字靭帯損傷の3回に分けて、学生が先生役を担い、学生同士で指導していく実習方式(小先生方

式)で実施している。

また、後藤⁸⁾はこれまでの養護教諭養成教育課程における問題点が、学外の養護実習や事前・事後指導について焦点をあて検討されているが、学内での実習を活用すべきであり養護教諭の実践力の向上が図れる授業の研究の必要性を説いている。後藤は養護活動実習Ⅰ・Ⅱにおいて“仮想学校づくり”を実施し、学校現場を想定しやすい状況を作ることによって養護教諭の実践力の向上を図っている。

養護教諭養成課程において修得する技術は多岐にわたり、それらを限られた時間で学習しているが、上記の先行研究でも明らかなように、養護教諭が学校現場において特に必要とされている技術はその中でも創傷の処置に関する技術などであり、これら学校現場で求められている技術項目として養成課程において指導できるカリキュラムの構築が望まれている。このことより今後、実習前に学校保健室で頻繁に用いられる看護技術の重点的な補習や、学校保健演習の指導内容の改善等によって、学生が学ぶ時間をいかに確保できるかを検討する必要がある。また、基礎的な看護技術の修得と同時に、あらゆる学校現場での状況を想定した看護技術の実践訓練としてシミュレーションなどを活用した教育プログラムの導入

も視野に入れるべきである。

今回の調査対象である学生の養護実習先は、ほとんどが小中学校で占められていた。校種特性を考慮すると、発達段階としては運動量が多く危険に対する自己対応力が未熟であると考えられる。そのため、「創傷管理技術」の必要性が高かったとも考えられる。小学校、中学校、高等学校といった校種によって必要とされる基礎的な看護技術にも差異が生じる可能性も視野に入れた指導上の工夫が必要である。

V. まとめ

養護実習中に学校保健室で養護教諭が用いる優先度の高い技術は、「創傷管理技術」であることが示された。また、学生の回答から、「創傷管理技術」のほかに、「症状・生体機能管理技術」カテゴリーにある技術項目も必要であるという点が明らかになった。本研究によって抽出された技術項目を学校保健室で特に必要とされる技術項目と位置付け、これを「養護看護技術」とし、重点的な指導が必要な技術であることを示した。また、自由記述欄に記入された歯科に関する技術項目や校種ごとに必要な技術項目の検討、そして児童生徒とのコミュニケーションの回り方といった新たな項目を指導内容に反映することで学生が不安なく実習に臨めるためには必要であることも考えられた。

小学校、中学校、高等学校といった校種ごとに使用する技術項目や要求される技術項目も差異があることが示唆された。

利益相反：利益相反基準に該当無し

文献

- 1) 公益財団法人日本学校保健会：平成 23 年度調査結果保健室利用状況に関する調査報告書。2013, pp 25—26.
- 2) 今野洋子：養護教諭の実践力育成をめざした学習の展開—「養護学演習 I」「養護学演習 II」の授業例。北翔大学生涯学習研究所研究紀要「障害学習研究と実践」12：81—92, 2009.
- 3) 大川尚子, 倉恒弘彦, 平田まり, 他：学生の養護教諭への志向性と養護実習の自己評価。満足度との関連。関西福祉科学大学紀要 15：115—122, 2011.
- 4) 長峰伸治：本学の養護教諭養成課程の現状と課題。聖隷クリストファー大学看護学部紀要 No.20：2—5, 2012.
- 5) 川崎裕美, 藤本比登美, 保田利恵, 他：これからの養護実習—技術習得における課題—。広島大学学部付属学校共同研究機構研究紀要 35：279—284, 2007.
- 6) 佐藤恵子, 吉本典子：養護教諭養成課程の学生に必要な看護技術（第 1 報）。九州女子大学紀要 53（1）：73—85, 2016.
- 7) 石川拓次, 永石喜代子：看護学実習 II における新たな試みについて—「実技が出来る」ための実習展開と新しい養護教諭の育成を目指して—。鈴鹿短期大学紀要 32：99—116, 2012.
- 8) 後藤ひとみ：養護教諭の実践力育成にむけて学内実習「養護活動実習」における仮想学校づくりのプロセス。愛知教育大学教育実践総合センター紀要 13：17—22, 2010.

別刷請求先 〒734-8553 広島県広島市南区霞 1-2-3
 広島大学大学院医歯薬保健学研究科地域・学校看護開発学
 岩佐 美香

Reprint request:

Mika Iwasa
 School and Public Health Nursing Institute of Biomedical & Health Sciences, Hiroshima University, 1-2-3, Kasumi, Minami-ku, Hiroshima-shi, Hiroshima-ken, 734-8553, Japan

Study of Nursing Skills Based on the Experience of Nursing Practice at Schools with Nursing Training Courses

Mika Iwasa and Hiromi Kawasaki

Institute of Biomedical & Health Sciences, Hiroshima University, Japan

<Objective> The purpose of this research was to grasp nursing skills experienced by students during field experiences at school health departments, as well as skills that were frequently used, skills with a high degree of difficulty, and skills that students wanted to learn at university at the start of nursing practice. In order to improve the curriculum, we tried to derive skills that need to be taught intensively in university.

<Method> This research was targeted at university fourth year students who took a nursing practicum from 2013 to 2015. A total of 68 students, 39 students from University A and 29 from University B, who cooperated with the research, were included in the survey. The collected questionnaire consisted of 70 practicum objectives. For the relation between the items which we felt difficult and the items which we think was better to increase the learning time, the χ^2 test and the Fisher's direct test were carried out.

<Result> The most frequent answer concerning items observed during practical was [plan of ingenuity to keep spiritual well-being]. The same for skills carried out during practical was [Wound protection (cut bang, gauze)]. The most frequent answer to the items used frequently during practical was "wound disinfection". As with the item that students found difficult, [confirming the symptoms and pathology accurately] received the most responses. [Observation of wound treatment] and [Protection of wound (cut bang, gauze)] were items which the students felt they needed further learning time.

<Conclusion> As a conclusion of this study, the skill used most by school nurse teachers was "wound management technology". In addition, students' answers revealed that in addition to "wound management technology", were items in the "symptom and biofunction management technology" category were also necessary. We identified the school items extracted in this research as items that are particularly needed in school nurses, and set it as "nursing care technology", indicating that it is a technology that requires emphasized guidance.

(JJOMT, 66: 117—123, 2018)

—Key words—

teaching practice, school nurse, nursing skills